

「カルト問題から考えるキリスト教社会倫理の課題」研究会

カルト問題から考えるキリスト教社会倫理の課題 と方法について 研究会趣旨説明

小海 基

2022年7月8日 安倍晋三元首相が遊説先の奈良の大和西大寺駅北口で、山上徹也容疑者(41歳)の手製の銃に撃たれて死亡して以来、連日の報道により「世界平和統一家庭連合(旧統一協会)」と政界、自民党、特に安倍派・清和会の関係が問題となりました。

これまでキリスト教社会倫理の視点で富坂キリスト教センターがNCC宗教研究所との共同プロジェクトとして「カルト宗教」問題を扱ったのは、『あなたはどんな修行をしたのですか?—オウムからの問、オウムへの問い』(2004年)でした。類書ではなかなか見られない仏教サイドからの説得方法とか、ジャーナリストの視点、オウムのグループがロシアで何をしていたかといった突っ込んだリポートもあり、大変興味深いプロジェクトであったと思います。

ただ同書を読んだときに思ったのは、キリスト教社会倫理という視点でもう一つ深めなければならなかった点があるのではないかということです。鈴木正三氏が引用していた丸山真男の言葉「私の青年時代を思うと、日本中オウム真理教だったのではないか。外では通用しないことが、内では堂々とまかり通る。違った角度から違った照明を当てることが出来ない。今も昔も『他者感覚のなさ』が問題だ。人一人の知的水準は相当高いのに、判断となると何故かおかしい」(1996年8月19日朝日の計報記事)というという言葉が大事な示唆を与えていると思います。鈴木氏は「天皇制」と絡めて展開しましたが、もっとキリスト教自体の「信仰」の有り方とか「宗教批判」の中で整理しなければならない課題というものがあるのではないかと思ったのです。オウム真理教という「カルト団体」の特異性についての解明と整理が同研究会時に必要だったことはよく分かります。同書に続いて、それ以前からの「キリスト教的カルト」として問題になっていた「世界平和統一家庭連合(旧統一協会)」を続けて扱うことを私は当時期待したのですが、残念ながらそこで止まってしまいました。同時に既成宗教団体であっても掘り下げて考えなければならない、「この線を踏み越えた時にカルト化する」というような考察がなされる必要を感じたのです。ミレニアムの分かれ目の時期(2000

～2001年)に向かって、聖書の「千年王国」説を引っ張り出して次々とカルト集団が嵐のように現れました。そういったたくさんの団体を総合的に、なぜ起こったのかという原因を探り、そのあらしを整理し、対策を示すようなプロジェクトは確かに富坂の共同研究にはふさわしくないでしょう(類書もたくさん出版されています)。そうした内容よりももっと別の考察が、私たちには必要であると思えるのです。

それは何かというと、「宗教の政治化」、「政治の宗教化」の問題としてきちんと正面から整理し直すということです。

私たち「キリスト教系カルト問題」の相談に乗っている者が90年代に米国カリフォルニアの主としてUCLAに調査に行った折に、近くでプロの買うセリングをしているヤンヤ・ラリックさんから話を聞いたことがあります(彼女の本が邦訳され話題になっていたこともありました)。彼女の背景もまた「カルト団体」から脱会して、現在はカウンセラーとして活躍しているという話を聞きました。彼女は「女性解放運動」、「フェミニズム」がカルト化したグループからの脱会者であったという話をしながら、「どんな宗教、思想運動、グループであってもカルト化の危険をはらんでいる」という実に興味深い指摘をしたのです。

D. ボンヘッファー最晩年の考察がヒントとなる

ここで思い起こすのは獄中で最晩年のボンヘッファーが示唆した2つのことです。一見2つのことは全く正反対のように思えるのだけれども、今日の「キリスト教系カルト問題」から見た時に、この2つの焦点から見る視点という事こそが実はとても大切だと思うのです。それは「非宗教的解釈(この世的解釈)」という事と「旧約聖書からの読み直し」です。

前者は「『神という作業仮説』の助けを借りることなく自分自身を処理する」(邦訳『獄中書簡』378頁)とか「神の前で、神と共に、われわれは神なしに生きる」(同書417頁)「成人性」と彼は言います。エルンスト・ファイルの『ボンヘッファーの神学』によれば、ボンヘッファーの初期からすでにこうした「成人性」、「この世理解」が始まっていることが指摘されています。このボンヘッファーの定式のもと、トマス・アクィナスから引き継がれた後期スコラ主義の定式「タトエ神ガ存在シナクテモ、アルイハタトエ神ガ理性ヲモチイナクテモ、アルイハタトエ神ガ物事ヲ正しく判断シナクテモ、ニモカカワラズ、モシ正シイ理性ノ同一ノ命令ガ人間ノウチニ住ンデイテ、彼ニ絶エズ、タトエバ、ウソヲツクコトハ悪ダト

イウヨウナコトヲ確信サセルナラバ、コレラノ命令ハ、コレラガ現実ニモツテイル同一ノ法的性格ヲコレカラモツコトニナロウ。ナゼナラバ、コレラハ、対象ノ中ニ本質的ニ存在スル悪ヲ指摘スル法ヲナスデアロウカラデアアル」(ウォルフガング・フーバー『正義と法』603頁注35) かもしれませんが、近代以降に生きる私たちのそれぞれの「宗教」を超えて自律して一致できる意識、理解です。このことを踏み越えてしまうと「宗教化」してしまいます。政治が「宗教化」していく問題というのは、「天皇制」や「靖国」問題、「日の丸・君が代強制」問題、「つくる会教科書」…といった具合に、「旧統一協会」と自民党、安倍派の癒着で日本社会に異様な政治的「同調圧力」がかけられ、押し付けられてきた価値観がその典型です。米国のトランプ政権末期に「議事堂襲撃事件」が「〇〇アノン」によって引き起こされたという報道がありました。これまでも米国の宗教右派が中心となって「墮胎手術」をした医師を殺害したり、「ジーザス・キャンプ」の名称で子どもたちに「洗脳教育」をする、全米ライフ協会と共闘して銃を持つ権利を主張する…といったことが繰り返されてきました。似たような意見、信条ばかり集まるところで、集団組織が偏向化していく「エコーチェンバー現象」を起こして行く、こうした傾向も、また政治の「宗教化」でしょう。

後者の「旧約的」にキリスト教神学を読み直すという事は、いつの間にかこの世の価値観、風潮で曲げられ、「反ユダヤ主義」的に軌道修正され、偶像崇拜的に流されているキリスト教信仰をもう一度ヘブライ語聖書から読み直していくことです。現代の諸「カルト宗教」はいずれも恐ろしいほど「反ユダヤ」的であり、民族差別的であり、序列主義です。この世の価値観、父権主義、エリート主義、拝金主義がまかり通っています。「旧統一協会」と自民党の癒着の中で政策にまで入ってきた一つに「純潔教育キャンペーン」問題があります。公立養護学校において「性教育という名のフリーセックス教育を行っている」という不当な言いがかりがつけられ、教員が司法で戦い勝訴したことが思い出されます。平和憲法改悪に反対して学生団体「SEALDS シールズ」が中心になって国会包囲デモが繰り返された時も、安倍首相の要請に応じて、にわか仕立てで大学の「原理研究会 CARP」の若者たちを中心に「国際勝共連合大学生遊説隊 UNITE ユナイト」が仕立て上げられ、「憲法改正査推進」の街宣をしたのが思い出されます。

2022年6月に「神道政治連盟」が自民党議員に配布した「同性愛と同性婚の真相を知る」というパンフレットは、なんと故楊尚真(ヤンサンジン) 弘前学院大文学部教授・宗教主任の講演録だという報道には本当にびっくりしました。冊子

には「同性愛は心の中の問題であり、先天的なものではなく後天的な精神の障害、または依存症」、「回復治療や宗教的信仰によって変化する」、「世界には同性愛や性同一性障害から脱した多くのLGBTの人たちがいる」、「LGBTの自殺率が高いのは、社会の差別が原因ではなく、LGBTの人自身の悩みが自殺につながる」…といった非科学的、前時代の「神学」的発言に満ちていて、冊子回収を求める署名がすぐに約3万9千も集まったといいます。韓国出身の楊氏がどのような背景の教派の牧師、学者なのかよく分かりませんが、キリスト教学校の名門校によくもこんな人が居座っていたものだと思います。こんな人が最近まで今も現役の教授として、大学のキリスト教式典一切を取り仕切り、学校礼拝の企画を握り続けていたのです。「神道政治連盟」の議員たちは旧統一協会と連携して「LGBT理解増進法案」国会提出見送りまで追い詰めます。こうした風潮は何も「旧統一協会」ばかりでなく、米国の「右派キリスト教」系のメガチャーチや、韓国のかつての軍事独裁政権と結びついたメガチャーチにも共通した、復古差別的価値観です。私はこれこそほかでもない宗教の「政治化」への踏み越えだと考えます。この問題については、聖公会の香山洋人氏が精力的に訳されてきた権知成（クウォン・ジソン）著『ウィルスにかかった教会』や、金鎮虎（キム・ジンホ）著『市民K、教会を出る』…といった著作が指摘しています。韓国の主要教派が3年前に大韓キリスト教長老会（PROK）の性的マイノリティーを支援牧会している女性教職を標的に「異端」宣告した問題も、宗教の「政治化」です。

ただ、この問題で気を付けて整理しなければならないのは、かつてブラジルの「解放の神学者」であるレオナルド・ボフ神父が、ヴァチカンに抗議して「神父職返上」した事件や、現在でもミャンマー軍事政権に抗議して仏僧がデモの先頭に立つようなことが、宗教の「政治化」を意味しているわけではないことです。世の小さな存在の側に立って、圧倒的権力を暴力的に振るう側に身を挺して盾となるとか、それこそボンヘッファーが担ったような、ひとりの「同時代人」として「ヒトラー暗殺計画」に参加するという事は、宗教の「政治化」とは区別しなければならないでしょう。この辺の整理こそ、宗教カルト2世によって引き起こされた今回の事件の中でなされていかなければならないと思います。

ところで2022年度「マンガ大賞第2位」をとった、魚豊著『チ。-地球の運動について-』（全8巻）をご存じでしょうか。これは「地動説」を「異端」として取り締まった「C教」（キリスト教）を描いたマンガで、コペルニクスの先生までの歴史を舞台としている。今後アニメ化もされるそうで、更に多方面に影響

し、話題を集める問題作です。第1巻から8巻まで生き残り続ける主人公はいません。主人公は次々と処刑され姿を消していきます。どうしようもないほどの当時の「C教」（キリスト教）の「カルト化」が描かれている。当時のカトリックの神学校で神の創造の秩序に迫りたいと信仰深く研究した天才が、あるいは「地動説」の存在を許したらサタンの支配を許してしまうと「地動説」主義者を取り締まり処刑していた側の子が、「地動説」に気づき、確認し、伝えていくという物語です。魚豊氏の絵もどちらかと言えば硬質で、決してうまいマンガとはいえないのですが、このマンガが評価されたのは既成キリスト教の「カルト化」、社会の暴力的「同調圧力」の問題を実に上手くえぐり、描いている点にあったと思われます。そこで敗者となり、処刑されて行っても、真実だけは残って伝えられていくのです。日本のマンガ史の中ではちょっと異色の存在です。このマンガが高く評価され、受賞までした後で、山上容疑者の事件が起こってしまったというのは、ある意味で私たちの社会が、「宗教の政治化」、「政治の宗教化」の問題をきちんと整理せよと、既成キリスト教の「神学」、あるいは「キリスト教社会倫理学」にむかって問いの声をあげているのではないかとも思われます。

このマンガには描かれていませんが、コペルニクス自身はカトリックの高位聖職者としてポーランドにあるフロムボルグ大聖堂で70年の生涯を静かに終えたようですが、やがて17世紀に彼の著作は「禁書目録」に入れられ、それが外されたのが200年も後の1820年であったと言います。「地動説」批判はカトリックばかりでなく、宗教改革者マルティン・ルターさえも、「動き回転しているのは地球であって大空とか天ではない、太陽や月ではないということ」を立証したいと考えたある新しい占星家の話題が出た。この馬鹿者は天文学の全部を根底から覆そうと思っているのだ！しかし聖書が示すように、ヨシユアが止まれと命じたのは、太陽にであって地球にではない」と、1543年の『卓上語録』で語っていますし、メランヒトンもカルヴァンも「地動説」を受け入れませんでした。後期スコラ主義やボンヘッファーの登場まで、こうした「政治の宗教化」、「宗教の政治化」は整理されなかったのです。

私はこういう共同プロジェクトでどういう方に加わってもらったら良いのかうまく推薦できないのですが、少なくとも聖公会司祭の卓志雄先生や香山洋人先生、長年宗教学的観点でカルト問題を扱ってきた方や前回の「あなたはどんな修行をしたのですか？」で活躍した志村真牧師、心理学者、社会学者、法律家に加わってもらえないかと思っています。中でも卓志雄先生が重要なのは、たくさんある「キ

リスト教系カルト」の中で、何故か欧米系のカルトはそれほど日本で影響を持たず、韓国の特に朝鮮戦争期に発生した神秘主義キリスト教の流れを汲むカルトが被害を与えているからです。そしてそれがアメリカ型のメガチャーチ志向と結びつき、軍事政権や保守政権と癒着して、変な形に膨れ上がっているからです。既成のキリスト教の中にも（実名では取り扱いませんが）、「日本基督教団立神学大学」で発生したバワハラ、アカハラ裁判や、同校の教授、出身牧師の下で起こった教会や教会付属保育園裁判のような、ある種の「カルト化」現象にまで届くプロジェクト研究がなされればと願っています。